様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　４ 月　７ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：奨励研究
研究期間：2023～2023
課題番号：２３Ｈ０５０５１

研究課題名　　変革をもたらすコンピテンシーを育む教材開発～豆は未来を救えるか～

研究代表者
一ノ瀬　孝恵（Ichinose, Takae）

広島大学・附属高等学校・教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　450,000円

研究成果の概要：　食料危機という地球規模の課題について考え追求するために、「豆」に注目した。豆関連の資料や冊子を存分に活用できるように整えたことで、グループで興味のある豆を一つ選んで徹底的に調査を行うことができ、互いの発表時にも複写ラベルシールを使用することでまとめを効率的に行うことができた。また、ゲストティーチャーの講演は、生徒が豆の栽培や利用方法、家族農業について理解を深めるための有意義な時間となった。人間にとっての豆の力と地球の自然環境にとっての豆の力を追求しその魅力を考える上で、生徒は多面的・多角的に思考を深め、既存の知識と新知識とを結びつけながら課題を乗り越えていこうとするコンピテンシーが育まれた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「豆」に焦点をあて、生活課題を追求することで、豆は人間にとって豊かな栄養をもたらす側面とその栽培は地球環境にやさしい側面があることを理解し、食料危機という地球規模の課題に目を向けて考え、自分事として捉えることができる生徒があらわれた。
一連の授業により、課題を乗り越えていこうとするコンピテンシーが育まれてきたことから、SDGｓの目標2や12および国連が2019年に定めた「家族農業の10年」である現在の課題について、豆を中心して家庭科の授業を構築することはグローバルな視点で物事を探究し，地道に行動できる生徒を育成するために意義あることだと考える。

研究分野：家庭科教育

キーワード：豆の力　食料危機　コンピテンシー　SDGs　家族農業

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究は、食料危機という地球規模の課題を考えるために、およそ一万年前から栽培され食料として人類を支えてきた「豆」に注目する。特に東アジア原産であるにも関わらず、その多くがブラジルやアメリカで生産される大豆、および中国、カナダ、オーストラリアなどで生産される小豆を中心に、バイオ燃料、家畜の飼料、ベジミート、行事や儀式などとの関連を掘り下げて考えるために、豆腐、おからをはじめとする大豆加工食品と多彩な豆料理などをとりあげて、自然生態系の転換と環境問題、食料問題から食のサスティナビリティを考えさせ、変革をもたらすコンピテンシーを育む高等学校家庭科の教材開発を目的とした。

２．研究成果

成果として、まず、「豆」という身近な食物、作物に注目して生活課題を追求することで、豆は私たち人間にとって豊かな栄養をもたらす側面とその栽培は地球環境にやさしい側面があることを理解し、食料危機という地球規模の課題に目を向けて考え、自分事として捉えることができる生徒があらわれたことである。また、豆関連の資料や冊子を存分に活用できるように整えたことで、グループで興味のある豆を一つ選んで徹底的に調査を行えたとともに、互いの発表時にも複写ラベルシールを使用することでグループのまとめや個人のワークシートへのまとめが効率的に行われ、学んだことや考えたことを個人のワークシートを見て振り返りがしやすくなったため、見方が深まった。調理実習でのテーマも豆と決め、豆料理と調査活動とを同じ日に行ったことで、筆者は準備が大変であった。しかし、生徒にとっては楽しみな内容であり美味しく試食できたことで、豆に対する興味が広がり生活への応用力が身についたと思われる。

さらに、本研究授業にゲストティーチャーの羽間氏をお招きし、非常にわかりやすい講演をしていただいたことは、生徒が豆の栽培や豆の様々な利用方法、家族農業について理解を深めるための大変有意義な時間となった。今回の授業の講師として最適な方と知り合えたことで、私たち人間にとっての豆の力（調査活動や調理から理解）と地球の自然環境（生態系）にとっての豆の力（羽間氏のお話から理解）を追求し豆の魅力を考える上で、生徒はより多面的・多角的に思考を深めることができたことも大きな成果であろう。

食料危機という地球規模の課題について考え追求するために、「豆」に焦点をあて、資料を存分に活用した調査や意見交流、効率の良いまとめ方、調理体験、ゲストティーチャーの講演などの活動を取り入れた一連の授業から、生徒が既存の知識と新しい知識とを結びつけながら課題を乗り越えていこうとするコンピテンシーが育まれてきたように見受けられる。一連の実践は、さまざまな分野の方のご協力を仰ぎながら、生徒自身がしっかりと食に向き合い、家族の方と共にこれからの食について考え生活の中で実践する力を育むものとなった。グローバルな視点で物事を考えながらも、世界をより良い方向へ変える力を身につけ、地道に行動できる生徒の育成をめざしたい。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名